

追記

これは、本来江沢所長が記さるべき「まえがき」であった。

記念パーティーの席に、定例総会（この総会で、大友福夫第二部長が次期所長に選出されたのであるが、折あしく社会政策学会幹事会と重なったため、パーティーには出席されなかった）にひきつづき出席された江沢所長は、さきの学長からの祝詞を読みあげて一同に披露され、ややあって退席された。多くの所員・研究員にとっては、この日が生前の江沢所長と言葉を交わす最後の機会になってしまった。

1968年10月以来6年有余にわたり名所長ぶりを発揮された江沢所長の任期満了（1975年3月）をまって、盛大な慰労会をと話しあっていた社研所員一同の楽しみは、永遠に失なわれてしまった。

生前の御恩——私個人のこととしてみれば、「デューラーとドイツ・ルネッサンス展」の会場（1972年5月・国立西洋美術館）で、偶然お逢いしたとき、先生のリーメンシュナイダーへの愛重の念を語っていただいたということをも含めて、生前の御恩に感謝し、御冥福を祈るばかりである。  
（事務局 鍋島力也）

---

（9頁2行目より続く）本稿の校正の際、私の研究所研究員解嘱の辞令が発見された。「願ひ  
依り研究員の委嘱を解く 昭和25年6月30日 専修大学社会科学研究所長 小林良正」。  
すなわち所長は学長の兼任であった（森下）。

---

〔 所 報 〕

○ 定例（「産構研」）研究会 1974年11月16日（土）午後2時～6時 神田校舎12  
A会議室 出席者12名

報告 泉 武夫所員 第1次大戦後の重工業化について。

宮田三郎所員 行政計画の法的諸問題について。

○ 「産構研」メンバー会議 1974年11月16日（土）午後6時～7時 神田校舎12A  
会議室 出席者9名 (1) 活動報告ならびに会計報告。(2) 合宿研究会開催の件。なお、この  
会議で、再び西岡幸泰所員に「産構研」担当を引受けていただくことになった。

○ 定例研究会 1974年11月30日（土）午後3時～7時 神田校舎12A会議室 出席  
者13名

報告 野原四郎研究員 西安事件とコミンテルン。

○ 創立25周年記念学術講演会 1974年12月10日（火）午後2時30分～6時30分  
生田校舎528号教室 参加者約150名 開会の辞——社会科学研究所の歩み—— 大友福夫所

員 社会科学としての政治学の発足 福島新吾所員 市民社会の歴史理論と現代 望月清司所員。

○ 第24回定例所員総会 1974年12月14日(土)午後2時～6時 神田校舎12A会議室 出席者26名 (1) 江沢所長挨拶 (2) 議長, 打田峻一所員選出。議題〔1〕昭和49年度研究活動中間報告ならびに財政報告 (1) 一般報告(鍋島事務局長)。(2) 各部報告研究会(鍋島所員)・編集(池田所員)・文献資料(加藤佑治所員)・「産構研」(西岡所員)。(3) 財政報告(二瓶所員)。(2) 昭和50年度研究活動計画案ならびに要求予算案 (1) 研究活動計画案説明(鍋島事務局長), 審議決定。(2) 要求予算案説明(二瓶所員), 審議決定。〔3〕「規程」改正 改正案説明(鍋島事務局長), 審議決定。〔4〕所員各部門所属名簿の確認。〔5〕所長, 三部長, 事務局長ならびに会計監査委員の改選 「規程」による投票の結果, それぞれ次のように決定。任期は, 1975年度および76年度の2年。(1) 所長, 大友福夫所員 (2) 三部長 第一部長(綜合理論部門)内田義彦所員 第二部長(実態部門)打田峻一所員 第三部長(歴史部門)森下澄男所員 (3) 事務局長 鍋島力也所員 (4) 会計監査委員 高橋七五三所員。

○ 創立25周年記念パーティー 1974年12月14日(土)午後6時～9時 神田校舎15階ホール 参加者約40名。 (事務局 鍋島)

<編集後記> 新幹線がこの3月から博多まで延長されるということで, 東京から九州まで7時間余で行けることになる。大戦後の技術の発達はまことに目覚ましいものがある。東海道線に特急「こだま」が走り6時間半で東京・大阪を結んで日帰りビジネス特急とさわがれたのもそう古いことではないのに, 今では3時間10分で走り, さらに, 東京・九州間の鉄道利用での日帰りも可能にしようとしている。速くまた大勢の人達が遠くに出かけられることはあるいは良いことかもしれないし, 現に岡山まで開通された後の混みようは相当のものであり, 人々が旅行に出る機会が増えたであろうことは考えられる。しかし, 新幹線の開通にともない在来線遠距離利用が不便となり, さらにこのたびは在来線の昼間の特急急行はほとんど無くなり, 新幹線利用を余儀なくされてくることになる。刹那的に目的地に到達し得てもそれにいたる過程は全く無視され時間をかける楽しみが無くなって, 人々に落着きを失わせ思索のときを奪っているように思えてならない。これははたして喜ぶべきことなのだろうか。(M)

神奈川県川崎市生田4764

専修大学社会科学研究所 電話(044)911-7131(内線63)

(発行者) 大友福夫